**【２０１５年度活動概要】**

2015年度は、研究メンバーの研究領域の広がりを考慮して、2014年度に引き続き研究部門全体の会議・研究会等に加え、テーマごとのワーキンググループ単位での研究会を充実させた。研究会議は、参加者の確保などを考慮して、関連する研究所や学会との共催などいろいろな形をとったが、ワーキンググループ単位のものを含めるとおよそ月1～2回の頻度になる。また、2015年は戦後７０年の節目の年だったので、これまで集中して調査研究してきた東日本大震災の被災地の動向をひとつの参照点としながら、日本の歴史や将来像、海外の事例との関連などを見据えて現代社会の危機の様相を理論的に解明していく研究を並行して進めていった。

本研究部門では、他の研究部門や関連学会とも協力して、2015年９月１９日～20日にかけて、人文研の後援により日本社会学会大会を早稲田大学戸山キャンパスにて開催した。大会では、戦後７０周年にちなんだシンポジウムやテーマごとの研究発表が多数行われた。

その他、研究部門の研究成果は、シンポジウムやワークショップの開催、全国各地での災害事例や地域の復旧・復興状況に関する報告や知見の発表、メンバー間の情報交換を兼ねた各種の研究発表などを通じて行われた。

それらのうちの一例を示すと、

・4月28日（火）には、研究部門の夕方の会議に引き続き、シニア社会学会「災害と地域社会」研究会と連携して戸山キャンパスにおいて研究会を開催した（報告者：星野英紀先生〔元大正大学学長、同大学理事〕／テーマ：震災の復旧・復興と宗教文化の行方―福島県を中心として―）。

・10月２８日（水）には、研究部門の会議に引き続き、地域社会と危機管理研究所（所長浦野正樹）との共催の形で、研究会を開催した（報告者：野坂 真〔早稲田大学文学研究科社会学コース博士後期課程／岩手大学非常勤講師〕、タイトル：岩手県大槌町における東日本大震災前後の災害過程―津波災害史と地域開発・振興史からの捉え直し―）。

・11月14日（土）には、当研究部門とシニア社会学会との共催で、シンポジウム「あれから5年 ～わたしたちはフクシマを忘れない～」を開催した。このシンポジウムは、東日本大震災発生から4年半が経過した時点で、あらためて避難区域から各地域に長期間に亘る避難生活をしている人びとにとっての生活の現状・課題や生活再建の捉え方を見据えようとしたもので、震災発生後からいわき市においてさまざまな立場から被災者支援活動に関わってきた方々を迎え、福島県浜通りのこれまでの歩みと4年半が経過した現状を共有したうえで、避難されている方々に対するこれからのサポートのあり方について考えようとしたものである。登壇者は、座長：長田攻一（シニア社会学会「災害と地域社会」研究会座長／当研究部門招聘研究員）、報告者：川副早央里（早稲田大学大学院博士後期課、いわき明星大学客員研究員）「被災状況が重層する地域で求められる支援―震災アーカイブの取り組みから考える－」、佐藤緑（特定非営利活動法人シャプラニール＝市民による海外協力の会 震災対応タスクフォーススタッフ）「取り残される被災者とともに歩んだ、NGOとしての支援活動」、平山勉（富岡町出身、富岡町情報発信サイト「富岡インサイト」や「相双ボランティア」など代表）「双葉郡住民としてのリアリティ」、コメンテータ：伊藤まり（浪江町出身、浪江商工会女性部副部長、グローバル研究会ふくしまメンバー）、浦野正樹（早稲田大学教授、早稲田大学人文科学総合研究センター＜現代の危機と共生社会＞研究部門代表）となっている。

・また10月～1月にかけては、支援力の向上をめざす会との共催により、学校・社会教育、男女共生、多文化共生、貧困対策、防災等々の課題解決のための取組みや活動を担う人びとの実践力量を高めることを目標とした「支援のための実践力アップセミナー」を開催した。講師としては、高井正（立教大学特任准教授・元足立区社会教育主事／10月24日開催）、熊谷真弓（母子生活支援施設のぞみ荘 施設長／12月12日開催）、山田恵子（荒川区スクールソーシャルワーカー／１月30日）らをお呼びして実施している。

　当研究部門の活動としては、これらのシンポジウムやワークショップの開催のほか、各種の学会活動やテーマ別の学内ネットワークなどで既に築かれた連携を深めて、それ以外の被災地域に関する情報収集も継続的に進めていった。

上記の活動を重ねながら、東日本大震災がもたらした社会的な課題については、被災地でこれまで抱え体験してきた課題を、調査研究活動のフィールドとしてきた岩手県大槌町、宮城県気仙沼市、福島県いわき市などを中心としながらも地域を超えた文脈でとらえ直し、相互に比較検討できる枠組みをつくったうえで、論文や研究報告などの形で一定程度のまとめを行っていった。また、2014年度いわき市において開催され、当研究部門のメンバーがそのコーディネート・司会や問題提起など中軸的な役割を果たした関東都市学会（東北都市学会との共催）秋季大会（2014年11月29～30日開催）については、関東都市学会年報に特集として掲載されている。この大会の開催地であったいわき市は、東日本大震災で、地震・津波・原発事故など直接的な被害を受け、その後も放射能汚染などの風評の影響を長期にわたって受け続けるとともに、避難指示や居住規制などさまざまな原発事故の影響を受けた福島浜通り地区の中心都市であり、現在原発避難者の多くが集まると同時に、原発事故収拾の拠点としても大きな役割を果たしつつある都市であるだけに、現代の日本社会の歪みを抉り出すものになったと思っている。